

図書 紹介

厚労省と新型インフルエンザ

著者：木村盛世（厚労省検疫官）

発行：講談社現代新書／〒112-8001 東京都文京音羽 2-12-215／Tel.03-5395-3521
（出版部）／新書判／205 頁／価格 740 円（税別）／2009 年 12 月 20 日発行

新型インフルエンザを扱った本は昨年より多く出版されているが、本書は少し異質である。著者は、現役の羽田空港検疫所に勤務する厚労省検疫官で、帯には「官制パニックはこうして作られた!」と刺激的である。昨年、テレビを連日賑わしたほとんど意味のなかった空港検疫と厚労省には厳しい内容になっている。今年にはいっても新型インフルエンザの患者数が大幅に減少し、報道も沈静化した。また、昨年 10 月から接種が始まった新型インフルエンザワクチンは、流行の鎮静化で 1 月現在大量の在庫が発生している。

異常なほどの騒ぎ過ぎだった新型インフルエンザ、今になれば当初のあの物々しさは一体何だったのか。的確な情報を提供してこなかった厚労省と世論を煽ったマスコミにその責任はあると断定している。本書は、著者が観察し巻き込まれた厚労省の迷走とキャリア採用の医系技官の無知と技官集団の権益維持を優先した行動についても触れられているが、決して内部告発本ではない。

第 1 章 新型インフルエンザと厚労省迷走記

第 2 章 悪のバイブル「行動計画」

第 3 章 公衆衛生学的にみるとどうなのか

第 4 章 公衆衛生の要－疫学の基礎知識－

第 5 章 これからのインフルエンザ流行に備えて

サブタイトルを見ていくとその内容のおおよそを知ることができる。第 1 章では、それはアマゾンの書き込みから始まった／『厚生労働省崩壊』想定問答集／検疫所の省内の地位／朝日新聞が取り上げた「検疫偏重批判」／握りつぶされた参考人招致／「上司だから部下を呼べない」健康局長／与党の参考人にも浴びせられる「やじ」／悪質ないじめをする「病んだ組織」／インフルエンザ対策より木村封じ／縦割り行政の弊害、第 2 章では御用学者とのなれあいで作られた／医系技官のコンプレックス／無意味な空港検疫／食の安全もこの際無視／「人種差別だ!」と叫んだ米国人／いとも簡単に行われた隔離・停留／テレビカメラの前で号泣した校長先生／マスクをしないと白い眼で見られ

る／血液製剤危機に関するお粗末な対応である。

第3章では初動体制の評価／費用対効果からみた検疫／関西だけが本当に蔓延地域だったのか?／追跡調査の意味／学校閉鎖の効果／マスクの有効性／民フルの濫用／インフルエンザワクチン／新型インフルエンザで重症化しやすい人は誰か／熱があっても必死で出社する日本人、第4章では、疫学とは／なぜ疫学調査が必要なのか／疫学の歴史／最初的一步－横断研究／第二のステップ－症例対照研究／第三の男ならぬ、第三因子というやっかいなもの／前向きの勝利の極み－PCT／ワクチンの有効性は どうやって決めるのか／スクリーニングの有効性である。

第5章では、大流行は誰の責任か／学校併催の意味をよく考えよ／濃厚接触者は危険人物ではない／マスクより大切なもの／ワクチン輸入の前にすべきこと／足りないワクチンをどうするのか／ワクチンを巡るごたごた／タミフル・パニック／H5N1 パンデミはありうるのか、いまの検疫法と感染症では対応できない／日本に必要な公衆衛生学グローバルな目線で考える。

国民の健康・生活や権利に直結する厚労省だけに、机上の空論や役人慣習でなく科学的根拠に基づいた危機管理体制を構築して欲しい。本書の疫学の基礎知識は、情報操作に踊らされるメディアと国民に対し、科学的な見方と思考の方法について分かりやすく解説しており、会員諸氏も十分役立つものと思われる。

昨年、世界を襲った「新型インフルエンザ」から学んだものを次に出現する「バイオテロ」や「鳥インフルエンザ」にどのように生かすかの視点で本書を読んでほしい(学会事務局)。